

新河岸川のあらまし（2）

新河岸川・荒川と堤防

新河岸川は荒川と武蔵野台地の間を流れ、主に台地からの水を集めている川で、川越の東側にある伊佐沼を源流とし、後述の昭和初期の改修工事までは、下内間木（朝霞市）の下流で荒川に合流していました。荒川とは親子のような関係で、かつては荒川を外川、新河岸川を内川とも呼ばれました。低地を流れる川の特徴ですが、どちらの川も頻繁に蛇行（自由蛇行）を繰り返しており、こうした川は水害を起こしやすく、宗岡などの沿川の村は常に水害にあっていました。

宗岡では、1644～62（正保1～寛文2）年頃、荒川の上流から続く堤防（荒川大囲堤）と新河岸川沿いの堤防（新河岸川除堤）に加え、上流側の南畑と下流側の内間木との境に堤防（佃堤と新田場堤）を築き、村全体を堤防で囲むことで洪水に備えましたが、これを惣囲堤と呼びます。こうした備えがあっても、度々水害に遭い、特に1910（明治43）年の被害は桁外れで、志木の台地（市場坂上）から浦和の台地（別所沼の先）まで幅6km程の荒川低地は全て水没しました。

新河岸川の舟運

新河岸川は勾配が非常に緩く、平時においては舟の運航に適しており、川越藩主の松平信綱は、新河岸川と荒川を利用し、川越と江戸の間で舟運を興しました。元々蛇行が多かったのに加え、舟が運行しやすいように人工的に蛇行を増やしたともいわれています。

沿川には多くの河岸場が設けられ、回漕問屋により舟の運航と物資の取引が行われまし

た。志木では当時の柳瀬川との合流点付近に引又河岸（明治以後は志木河岸）が設けられ、市場地区が栄えました。その対岸に宗岡河岸、近隣に前河岸・宮戸河岸がありましたが、1914（大正3）年に東上鉄道（池袋～川越）が開通する等の影響で舟運は衰退しました。

新河岸川の改修工事

1910（明治43）年の未曾有の水害では、関東地方で死者・行方不明者847人、家屋全壊・流失5,000戸の被害を出し、これを契機に荒川（現深谷市より下流）と新河岸川の大改修工事が行われました。

新河岸川の工事は1922（大正11）～30（昭和5）年に行なわれ、下流では、下内間木の荒川との合流点を廃止し、そこから北区の岩淵水門まで新たな川を開削して隅田川に繋ぎました。下内間木から上流では、蛇行した河道の直線化や兩岸への堤防の築造等が行われ、直線化により旧新河岸川部分の長さは3分の2に縮まり、現在の流れになりました。江戸時代の惣囲堤が村を守るように取り囲み、川は広い堤外地を自由に流れていたのに対し、新しい堤防は真っ直ぐな川を挟み込み、河道ぎりぎりの所に造られました。

こうした昭和の改修の成果も長くは続かず、戦後の都市化の進行と共に再び改修が必要となり、河川断面拡大のため、30年ほど前から堤防の移動やかさ上げの工事が行われました。いろは橋の下流には江戸・昭和・平成の3代の堤防が並行しているのが見られます。

（天田 眞）



志木・宗岡付近の蛇行した新河岸川（中央が柳瀬川の合流点）1885（明治18）年頃